KCE

Kawaguchi Chamber Ensemble

川口室内合奏団

第 8 回演奏会

2023 年
7 月 16 日（日）
13:30 開場
14:00 開演

リリア
音楽ホール

ご挨拶

団長　山口尊実

本日は、川口室内合奏団第 8 回演奏会にご来場下さいまして、まことにありがとうございます。おかげさまで、8 回めの演奏会を開催することができました。重ねて御礼申し上げます。

今回は、バッハの無伴奏ヴァイオリンパルティータの第 3 番を抜粋ではなく全曲お送りいたします。たっぷりご堪能ください。

そして、ヴィヴァルディの「四季」が、今回で、春、夏、秋、冬の four season「チクルス」完了です。夏の冬をお楽しみください。

そして今回もダモーレに挑戦します。まだまだ不慣れなのですが、頑張ります。時間の関係で短縮版となっておりますがご容赦ください。

シンフォニーは、あまり耳にすることのないであろうハイドン「疾風怒濤期」前の２曲をお送りします。お楽しみください。そして今回もアンコールのような形でモーツァルトの交響曲第 10 番をお送りします。今回取り上げるシンフォニーはハイドンもモーツァルトも形式がちょっと面白いので、後ろの解説を読まずに演奏をお楽しみください。

残念なお知らせなのですが、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、川口総合文化センター・リリアが、令和 6 年 3 月から約 2 年間、大規模改修のため、全館休館となります。当団も同じ形式での演奏会をすることができなくなってしまいました。アンサンブル等できないかなぁと考えているところです。計画が具体化し次第、HP で発表する予定です。よろしくお願いします。

Program

J. S. Bach　無伴奏ヴァイオリンパルティータ第 3 番

A. L.Vivaldi　協奏曲第 4 番ヘ長調 RV297 『冬』

J. S. Bach　オーボエダモーレ協奏曲ニ長調 BWV1053R

＜休憩＞

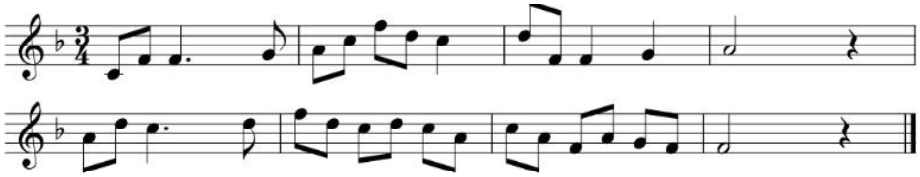
F. J. Haydn　交響曲　第 30 番 ハ長調 Hob.I-30『アレルヤ』

F. J. Haydn　交響曲　第 58 番 ヘ長調 Hob.I-58

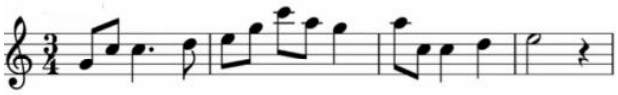
W. A. Mozart 交響曲　第 10 番 ト長調 KV74

音程、音階、音律

突然ですが、次の曲はみなさんご存じですよね。

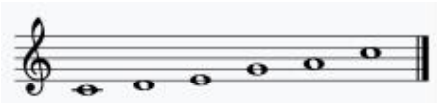


そうです。三木露風作詞、山田耕筰作曲「赤蜻蛉」。この曲についてみていきましょう。分かりやすくするために、ハ長調にしてみます。



音楽の授業のようで恐縮ですが、特徴に気づきませんか？　学校などで先に「知識」として「習って」しまっていると「知ってるー！」みたいな私の嫌いなテレビ番組のようになってしまうのですが、言われなくても楽譜をよく見れば（楽譜を見なくても？）ファとシがないことに気づくでしょう。

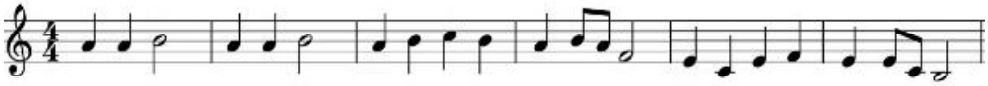
そうなんです。我々は、昔からこの音階に慣れているというか、これしかなかったというか、そういう文化というか民族だったわけです。



ど　れ　み　そ　ら　ど

「ど～れ」、「れ～み」、「そ～ら」が全音（長二度、半音 2 個）、「み～そ」、「ら～ど」が全音+半音（短三度、半音 3 個）であることが分かります。

「赤とんぼ」は、長音階でした。さて、いかはいかがでしょう？



ら　し　ど　~~れ~~　み　ふぁ　~~そ~~　ら

同じように、4 番目と 7 番目が抜けてますね。

ところで、もうどれくらい前になりますでしょうか、「千本桜」が流行ったのは。和楽器ヴァージョンがあるように、親和性がいいというか、もともとヨナ抜きなのです。[*1*2]

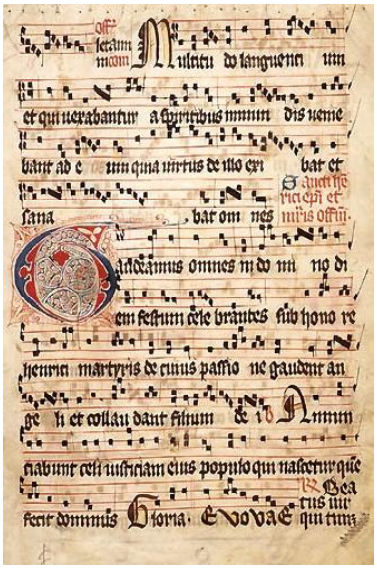
---

*1「はーるばるーきたぜはーこだてー」

この歌を聴いた瞬間に「ヨナ抜きだ」とわかった人は日本にどれくらいいたんだろう？　みなさんはいつわかりましたか？

*2「蛍の光」は元はスコットランド民謡と知って驚いた経験をお持ちの方も多いと思う。「えー、日本の歌だと思ってた」と。はるか離れた日本とスコットランドの民謡のたまたまの偶然なのか、はたまた DNA に組み込まれた人類の普遍的な共通の感性なのだろうか。

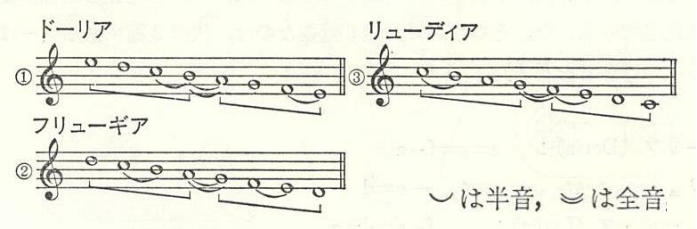
ここで、ちょいと旋法の話を挟んでおこう。グレゴリオ聖歌のメロディも出てくることだし。そもそも、グレゴリオ聖歌のころは、モノフォニーつまり単旋律で、楽譜も現在のものとはかなり異なっている。[*1]



独唱者が歌い出し、その音程で合唱になっていく等の形であったので、基準になる周波数はなかった。地域によっても教会によっても、日によっても音程は微妙に違っていたことは想像に難くない。

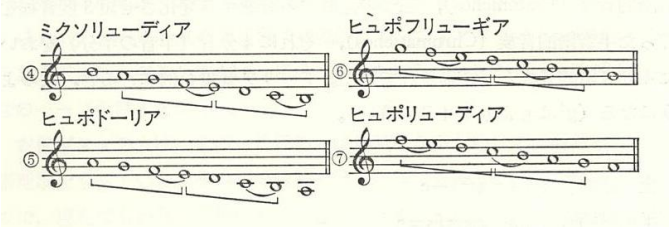
ドイツは 1834 年に A=440Hz を標準としたり、フランスは 1860 年代から A=435Hz が標準であったりしていたのだが、アメリカの音楽産業界が 1926 年に A=440Hz を標準とし、楽器製造で使用されたのが大きな影響をもたらした。その後、米国規格協会（ASA）や万国規格統一教会（ISA）が A=440Hz を採択していき、1955 年に国際標準化機構（ISO）が A=440Hz 採用し、現在に至っている。（ベルリンフィルやヴィーンフィルは 445Hz やもっと高いと言う噂もあります。実際に聞きに行きますか！？）

ところで、突然ですが、旋法の話。（戦法ではありません。）



右のように、古代ギリシャでは、完全 4 度の間に 2 つの音を挿入、つまり 4 つの音で 1 ブロックを作り、それを 2 つ繋げる。

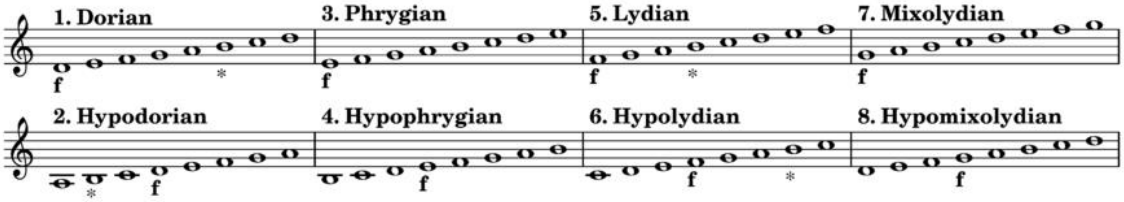
その 1 つのブロックの中に半音が入るのだが、その半音の位置で、ドリア、リディア、フリギア（引用とは呼び名が違うが、こっちが一般的？）の 3 つができあがる。



さらに、共通の音で接続すると、右のように 4 つの旋法ができる。

ピタゴラスは音程の比率によって 5 度圏を考え、ピタゴラス音階を導き出した。（後述）

教会旋法↓



同じ「旋法」なのだが、グレゴリオ聖歌で用いられている教会旋法は 8 世紀頃に確立した。終止（f）と反復音（*）を持つ。「グリーンスリーブス」や「ジムノペディ」はドリア旋法で作られている。ジャズやポップスでも旋法（一部）がよく使われています。

---

*1 その後、ポリフォニーやホモフォニー等進化していくのですが、紙面の都合でまた次回。

さて、音律の話。

再びピタゴラスに登場してもらおう。鍛冶屋のハンマーの音程がその重さで音程が異なることを突き止めたというようなことが「伝説」としてあるが、質量と音程の関係はないので、それっぽく誰かが作ったのだろう。弦の長さの話だけにしておけばよかったのに。。。

さて、弦の長さを半分にすると音がオクターブ上になる。オクターブ上になるというのは、周波数が 2 倍になるということだ。そして、ある音の周波数を 1.5 倍にすると心地よく響く音程が得られる。ドに対して上のソである。周波数を 1.5 倍にするということは、長さを 2/3 にするということだ。すると、ソの上はレだ。その長さを 2 倍にすると、オクターブ下のレが得られる。このレを 2/3 倍して、ラが得られ、ラを 2/3 倍してミが得られる。ミを 2 倍にしてオクターブ下のミを。そのミを 2/3 倍してシが得られ、そのシを 2/3 倍してファが得られ、そのファを 2 倍にしてオクターブ下げる。ファを 2/3 倍してドが得られる。

ド→ソ→レ→ Oct 下レ→ラ→ミ→ Oct 下ミ→シ→ファ→ Oct 下ファ→ Oct 上のド

これで、ドレミファソラシドが全部得られ「めでたしめでたし」、と思いきや、最初のドとオクターブ上のドを同時にならすと、きれいに響かない。

例えば、最初のドを 120 ㎝としましょう。すると、5 度上のソは 80 ㎝、その五度上のレは 53.3 ㎝、その 2 倍にしてオクターブ下げて、106.7 ㎝…

ド 120　　ソ 80（ドの 2/3）　　レ 53.3（レの 2/3）

レ 106.7（53.3 の 2 倍）　　ラ 71.1（レの 2/3）　　ミ 47.4（ラの 2/3）

ミ 94.8（47.4 の 2 倍）　　シ 63.2　　ファ＃ 42.1

ファ＃ 84.3　　ド＃ 56.2　　ソ＃ 37.5

ソ＃ 74.9　　レ＃ 50.0　　ラ＃ 33.3

ラ＃ 66.6　　ミ＃ 44.4　　シ＃ 29.6

シ＃ 59.2　←これはドだよね？　いや違う？

長さを 2/3 にすることを 12 回。長さを 2 倍にすることを 6 回。オクターブにならない！

しつこいですが、今度は、周波数で考えてみましょう。多分、多くの楽器奏者は周波数のほうが慣れていますよね。ド＝ 440Hz としましょう。（A-dur ？）

ド 440　　ソ 660（ドの 1.5 倍）　　レ 990（レの 1.5 倍）

レ 495（990 の 1/2 倍）　　ラ 742.5　　ミ 113.75

ミ 556.875　　シ 835.125　　ファ＃ 1252.96875

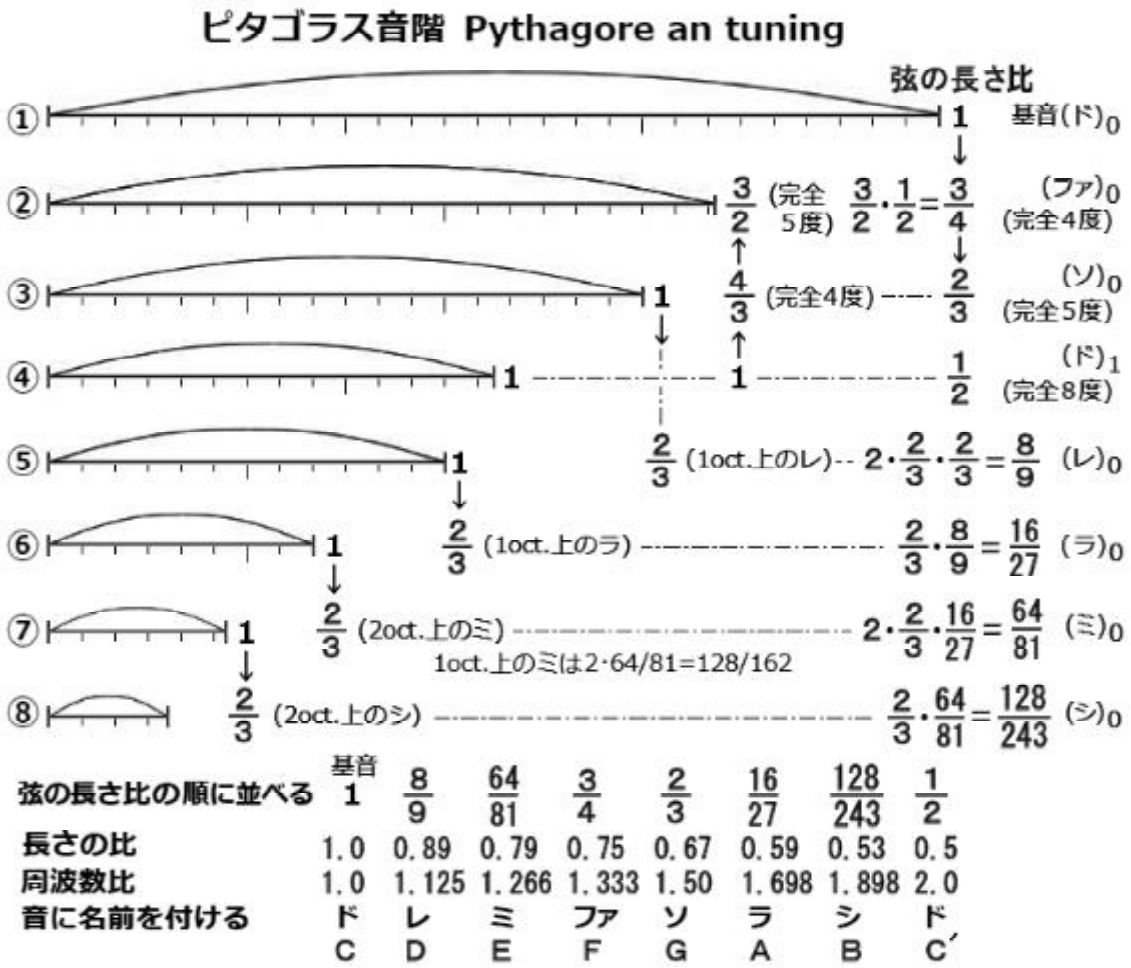
ファ＃ 626.484 …　　ド＃ 939.726 …　　ソ＃ 1409.589 …

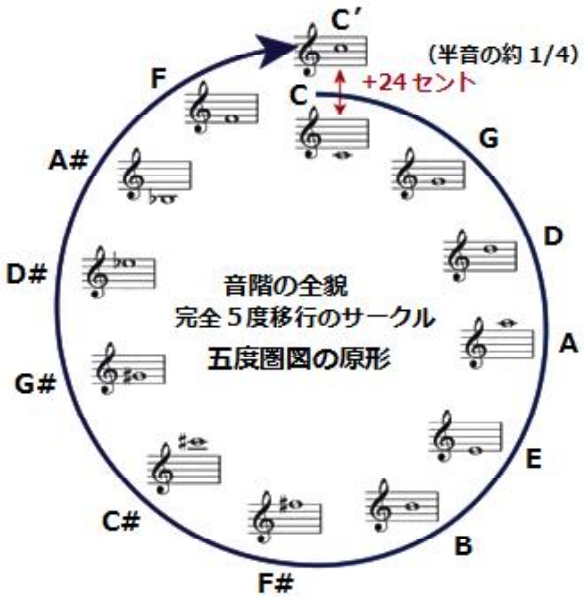
ソ＃ 704.794 …　　レ＃ 1057.192 …　　ラ＃ 1585.788 …

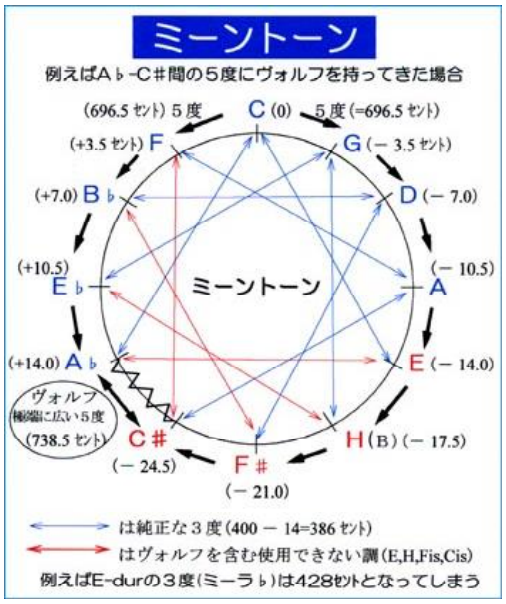
ラ＃ 792.894 …　　ミ＃ 1189.341 …　　シ＃ 1784.012 …

シ＃ 892.006 …　←これはドだよね？　いや違う？

右に行くときに 1.5 倍（5 度上）、改行するときに半分（オクターブ下げ）なので、結局、1.5 倍を 12 回、半分を 6 回やると、ぴったりオクターブ上にならない。計算であらわすと、1.5^12*0.5^6=2.0272865 …となってしまい、周波数が 2 倍にならない。つまり。五度五度で合わせていくとずれてしまうのです。







http://verse.jpn.org/music/index.html https://voce.main.jp/MameChisiki/Tyouritu.htm

他に、キルンベルガー(1721-1783)の第３調律法やヴェルクマイスター(1645-1706)の調律法などもあります。

1 オクターブで周波数は 2 倍です。2 オクターブで周波数は 4 倍です。これは知る人ぞ知る等比数列です。

1 オクターブの中には半音が 12 個あります。半音 12 個なので、12 回掛け算して 2 になる数といえば、、、そうです。12 乗根です。 $\sqrt[12]{2}$ です。これは無理筋です。否、無理数です。1.059463094359295264 …です。

オクターブを均等に 12 分割すると、完全五度との差が生じます。例えば、完全五度だと、周波数が 1.5 倍で心地よく響くのですが、平均律だと 1.4983 …倍なので、微妙にうなりが聞こえます。

私たちは、音の高さを相対的な比で感じています。言われてみればなるほどと思っていただけると思いますが、例えば、低音 20Hz に対しての 1 ヘルツと、高音 10,000Hz に対する 1 ヘルツでは、その意味合いがかなり異なります。1 秒に 1 回の振動でも、20Hz と 21Hz だとそのうなりは明らかにわかるでしょう。しかし、高音 10KHz に対する 1Hz は誤差ですね。（10KHz は 1 秒間に 1 万回の振動しているわけなので、当然誤差ですよね。）

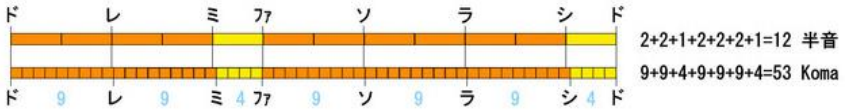
しかしながら、日常的に指数やら対数を用いるのは慣れていないと大変なので、半音を 100 分割したセントという便利な単位があります。このセントを用いて、私たちは練習時に、完全五度は約 2 セント広く。長三度は 13.7 セント狭く、短三度は 15.6 セント広く、という感じで心地よい響き、純正和音を作っています。

とは言うものの、現在広く用いられているのは、ピアノを考えていただければわかるように、基本、平均律です。例えば、和音を重視するあまりにハ長調の純正律でリコーダを作ったとします。すると、３人でドとミとソの音を出すと心地よい響きを得られます。が、転調するたびに、その調のリコーダ、例えばト長調とか、ヘ長調とか、それぞれの楽器に持ち替えなければならなくなってしまいます。また、それ以前に、音階を奏でると、ドに対して長三度上のミが低くなってしまい、かなり歪（いびつ）に感じてしまいます。

ピアノの方がわかりやすいでしょうか。ある調の純正律で調弦してしまうと、転調したときに響きがおかしくなってしまいます。ギリギリ五度の転調くらいでしょう。しかしながら音楽の進化？とともにそれでは済まされなくなってしまいました。もっとも、バッハの時代すでに平均律クラヴィーア曲集とかでてきてるわけで、17 世紀にすでに鍵盤の世界では平均律が確立していたのです。

純正律、純正和音を求めつつ、平均律とうまく共存せざるを得ないのです。割り切れないのだからしょうがないのです。ここぞという時には心地よい響きを求めうまくコントロールし美しいハーモニーを作る。一方、ヴァイオリンの無伴奏であれば、奏者の感性で微妙な音程を作り出す。近現代のような曲の場合、幾度の転調にも耐えられるように平均律で微妙に調弦する。これは調律師の技、あるいは個性が出るところでもあります。

ピタゴラス音律、純正律、中間をとった文字通りミーントーン、その他いろいろあるのですが、再び紙面の関係で、また次回に回したいと思います。（4 分の 1 音とか、9 分の 1 音とか）



↑　トルコの Koma

Johann Sebastian Bach ヨハン・ゼバスチャン・バッハ

1685 ～「アイゼナハ時代」3 月 31 日、大音楽家の末子として生まれる。
1695 ～「オールドルフ時代」両親が没し、長兄に引き取られ、オールドルフへ。
1700 ～「リューネブルク時代」北ドイツリューネブルクで教会付属学校給費生に。
1703 ～「アルンシュタット時代」ヴァイマル宮廷楽師兼従僕、新教会オルガニストに。
1707 ～「ミュールハウゼン時代」マリア・バルバラと結婚、 7 人の子どもをもうけた。
1708 ～「ヴァイマル時代」現存するオルガン曲の大半を作曲。イタリアの影響を受けた。
1717 ～「ケーテン時代」『ブランデンブルク』、『無伴奏ヴァイオリン』等室内楽を作曲。
1723 ～「ライプツィヒ時代」ライプツィヒでトーマス教会カントルに就任。『マタイ』、『ヨハネ』などを作曲。『ロ短調ミサ曲』を完成後視力を失い、『フーガの技法』未完のまま 1750 年 7 月 28 日没。65 歳。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第 3 番ホ長調 BWV1006

プレリュード～ルール～ロンド風ガヴォット～メヌエットⅠ、Ⅱ～ブーレ～ジーグ

この時代のイタリアでは、ストラディヴァリウス、ガルネリなどのヴァイオリン制作者がいたこともあり、ヴィヴァルディ、コレルリ、タルティーニといった作曲家たちによる多くの協奏曲が流行っていた。バッハもその影響を受けた作品をたくさん作っている。

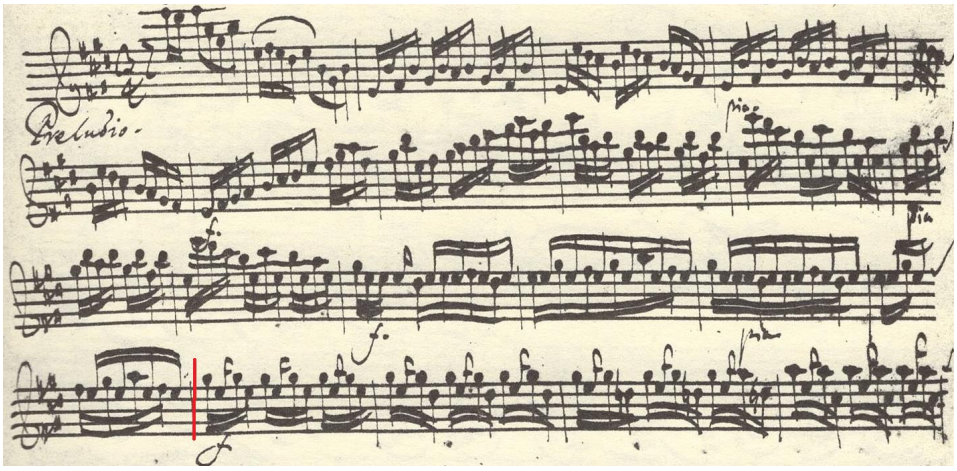
この無伴奏ヴァイオリンパルティータ第 3 番も、E　dur ということもあり、イタリア風に明るく華やか、軽やかな雰囲気をもち、名人芸的要素も含まれる。

各楽章のタイトルがフランス語で書かれており、バロックでの舞曲集の定型[*1] からはずれた並びになっていることから、フランス宮廷で流行していた舞曲を集めて、自由に組み合わせた組曲になっていると言える。

イタリア風な朗らかさと、フランス王宮の優雅さを合わせ持った組曲である。

Preludio　プレリュード（前奏曲）4 分の 4 拍子

8 分休符で始まり、最初の 2 小節はファンファーレのように 8 分音符メインで E-dur の

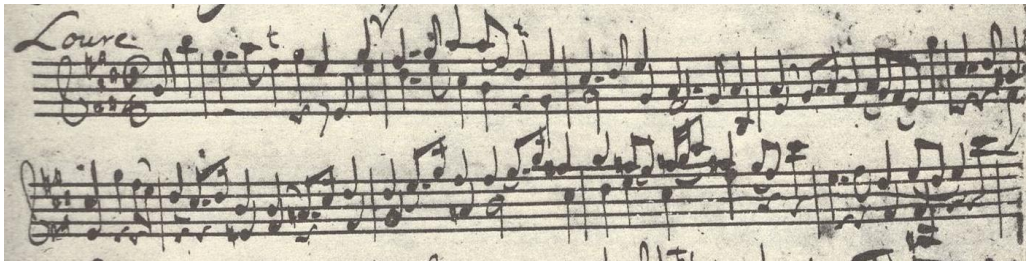


*1 バロックの舞曲集の定型は、アルマンド～クーラント～サラバンド～ジーグである。

Ⅰ度の和音を分散和音で奏でる。以降休みなく和声感のある 16 分音符が続く。
途中 2 カ所に技術的に難しいアルペジオの奏法が出てくる。(譜例では赤線部分の一カ所)

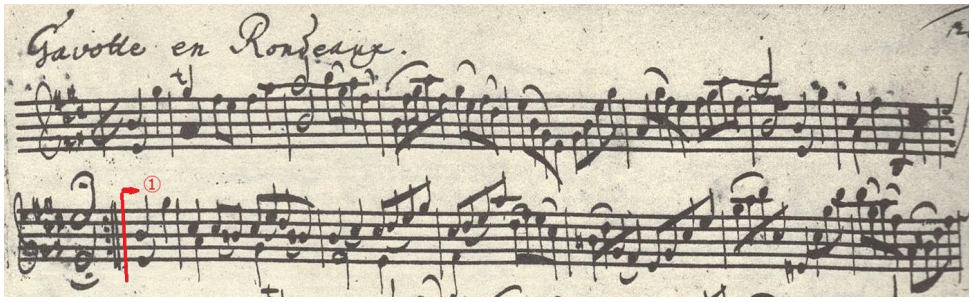
Loure　ルール　4 分の 6 拍子

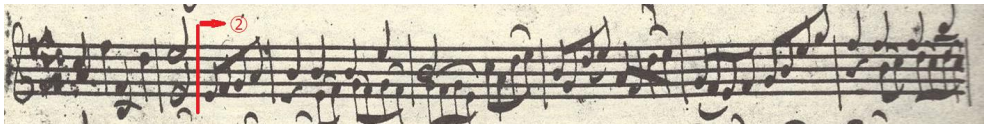
ゆったりとしたテンポの舞曲。複合 2 拍子。アウフタクトで始まる 3 拍子。宮廷の優雅さを思わせるきれいな旋律で、重音の下の声部の伸ばした音が重要である。



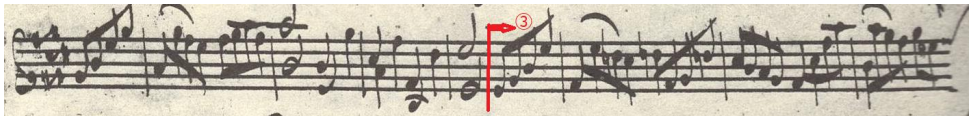
Gavotte en Rondeau　ロンド風ガヴォット　2 分の 2 拍子

ガヴォットをテーマにした、ロンド[*1]。ガヴォットは、1 拍分のアウフタクトを持つ 2 拍子の舞曲。力強く元気の良いテーマに挟まれた旋律は、①短調→②長調→③短調→④短調の順である。何回も出てくるテーマは、毎回少しずつ表情を変えながら演奏する。

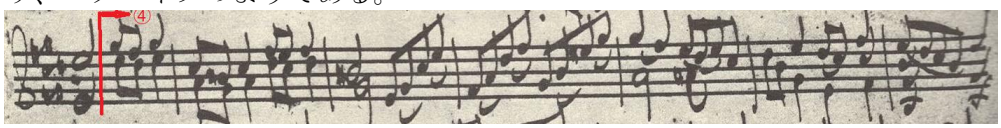




3 番目に挟まれている旋律は単旋律で、2 小節未満の旋律を同じ形で移調しながら繰り返されるゼクエンツが多用されている。



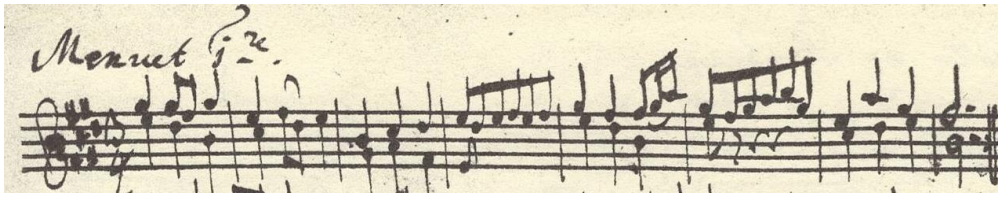
最後に挟まれている cis-moll の旋律は大変ドラマティックである。高音部に持続音があり、バグパイプのようである。



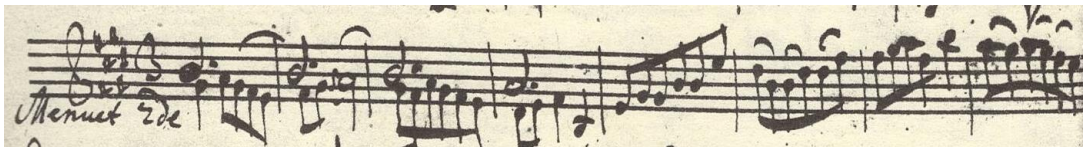
*1 ロンドとは、違う旋律を挟みながらテーマが何回も繰り返される形式。

Menuet Ⅰ－Menuet Ⅱ　メヌエット　4 分の 3 拍子

Ⅰ～Ⅱは切れ目なく演奏され、再びメヌエットⅠに戻る。ゆったりとした王宮的な優雅さのある舞曲で重音が多用されている。

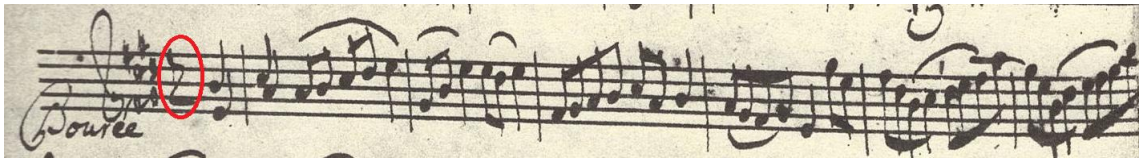


メヌエットⅡには当時フランスでミュゼットという楽器（バグパイプ）が流行っていて、その音を模した持続音が高音部に現れる。



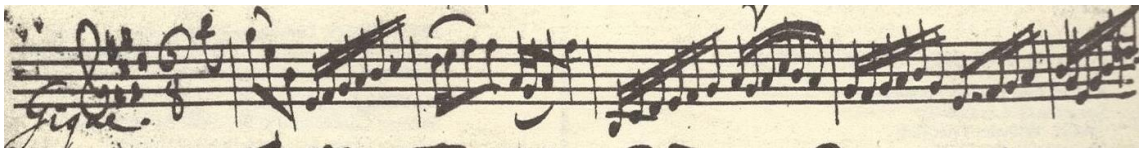
Bourree　ブーレ　2 分の 2 拍子

ブーレは、半拍分のアウフタクトを持つ舞曲。アウフタクトを半拍にすることにより勢いがつく。大きく 2 と書いてあるのは、速いテンポであることを意味する。名人芸的要素の入った活発な曲。



Giga　ジーグ　8 分の 6 拍子

アウフタクトを持つ複合 2 拍子。活発に動き回る。最後を締めくくる曲だが、案外あっさりと終わる。



Antonio Lucio Vivaldi アントニオ・ルーチョ・ヴィヴァルディ

一般的な解説はネット等に任せるとして、ヴィヴァルディ(1678-1741)は単なる作曲家でなかったということは「常識」として共有しておきたい。彼は、ヴァイオリニスト、音楽教師、司祭などと多方面で活躍していたのみならず、弦楽器に様々な新しい奏法を導入したことは特筆すべきだろう。それは当時の聴衆にとっては革新的なものだった。クラシック音楽も（バロック音楽も)、その当時の人たちには常に新しいものだった。

『和声と創意の試み』(Il cimento dell'armonia e dell'inventione）作品 8 は 12 曲からなるヴァイオリン協奏曲集で、その 1 番～ 4 番がいわゆる『四季』である。私が初めて聞いたとき、「ヨーロッパも日本も四季があって同じだ！」と思ったことを今でも思い出す。当時聴いたのは、ミケルッチのイ・ムジチによる演奏だったのだが、その後、その前のアーヨの演奏も良いとのことで、聞き比べたところ、かなり演奏が違って興味深かった。しかしいまやそれらの演奏よりもよりピリオド的な演奏が好きになっている自分がいる。みなさんは好みの変化はありますか？

私はやっぱりノリントン[*1] との出会いかなぁ。いつどうやって出会った（知った）のか、もはや覚えていないのだけれど、批判も少なくない中、私は彼の世界、いや、ピリオド奏法の世界に引き込まれていきました。[*2]

最近（といってもすでにもう何年もたちますが)、けっこう速いテンポの演奏が増えている傾向にあります。かつてのなんでも「ロマンティック」に情緒たっぷりに歌いまくるのではなく、さくっと進んでいき、さくっと終わるような。そして、それぞれの団体がほんと個性を出してきているように思います。[*3]　多様性の時代になってはや何年。教科書的な演奏はほぼ消滅し、ユニークな演奏が増えました。そして、自分の好みの演奏、好みでない演奏、驚きの演奏等、いろいろな出会いがあり、それはそれでいいことですかね。

さて、私たちの演奏はみなさんにはどう感じられるでしょうか。

---

*1Sir Roger Arthur Carver Norrington CBE, 1934 年 3 月 16 日生まれ。ノンビブラートで奏でる「ピュアトーン」。これが慣れると離れられない。そしてビブラートが気持ち悪い。というか、気持ち悪いビブラートに反応してしまう。（ビブラートについては第 7 回演奏会のプログラムを参照してください。http://kce.e1.valueserver.jp/program/07program.pdf）

*2 厳密なピリオド奏法とは何かという議論はありますが、それはまた別の機会に。

*3 もう 50 年前の演奏になってしまうのですね。当時はかなり驚愕された、or 変人扱いされた？ Alice Harnoncourt, solo vn, Nikolaus Harnoncourt / Concentus Musicus Wien　March.1977
https://www.youtube.com/watch?v=gt4Of-da32w

こちらもユニークな演奏で、うんそれはなぁ、という部分も多々あるのですが、なかなか興味深い演奏です。Amsterdam Sinfonietta en violiste Janine Jansen spelen Vivaldi's 'Vier jaargetijden' tijdens het Internationaal Kamermuziek Festival 2014
https://www.youtube.com/watch?v=zzE-kVadtNw&t=128s

ヘンデルの「水上の音楽」ですが、古楽器が楽しめます。G.F. Händel: Water Music - Akademie für alte Musik Berlin - Live concert HD
https://www.youtube.com/watch?v=EVAB2z1RPu4&t=2869

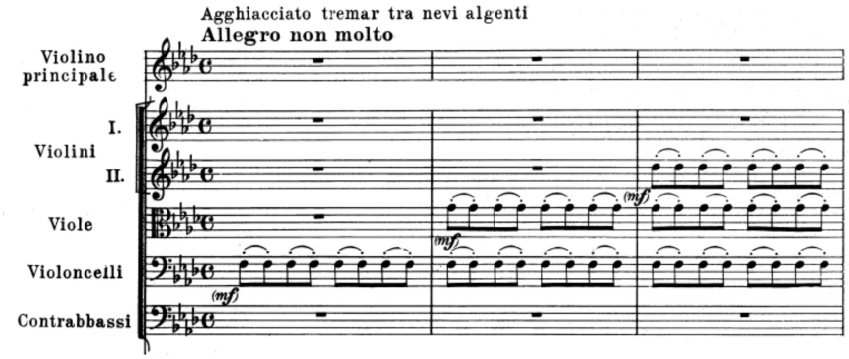
Il cimento dell'armonia e dell'inventione　和声と創意の試み

Concerto in Fa minore　“L'inverno”　協奏曲 へ短調 『冬』

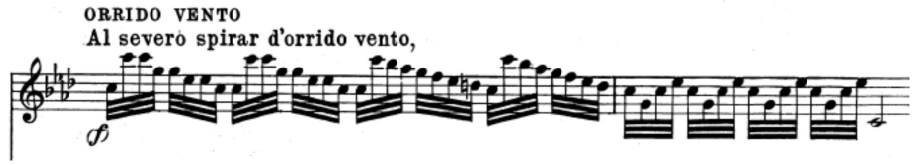
第１楽章　Allegro non molto　４分の４拍子

Agghiacciato tremar trà nevi algenti	Chilled trembling among algent snows
Al Severo Spirar d' orrido Vento,	At the Severe Spirar of horrid Wind,
Correr battendo i piedi ogni momento;	Running beating his feet every moment;
E pel Soverchio gel batter i denti;	And by the Overpowering gel beat their teeth;

Agghiacciato tremar tra nevi algenti　　冷たい雪の中で凍えるように震える



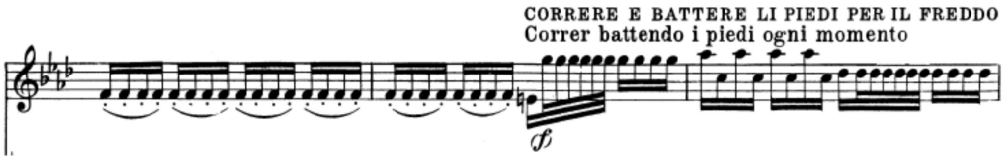
ORRIDO VENTO　　HORRIBLE WIND　恐ろしい風



Al severo spirar d'orrido vento,　恐ろしい風の厳しい渦の中で

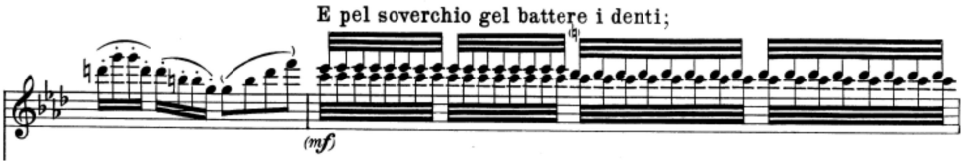
CORRERE E BATTERE LI PIEDI PER IL FREDDO

RUNNING AND STAMPING THEIR FEET FROM THE COLD



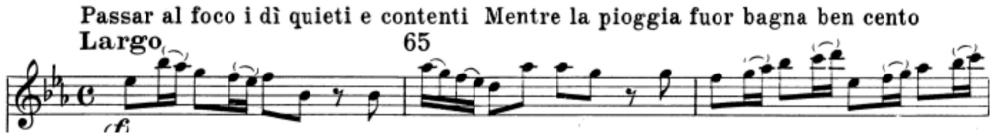
あまりの寒さにずっと走り足踏みする

E pel soverchio gel battere i denti;　　そして、圧倒的な寒さに歯の根が合わない



第２楽章　Largo　4 分の 4 拍子

Passar al foco i di quieti e contenti	Passing to the fire the quiet and contented ones
Mentre la pioggia fuor bagna ben cento	While the rain out bathes well a hundred

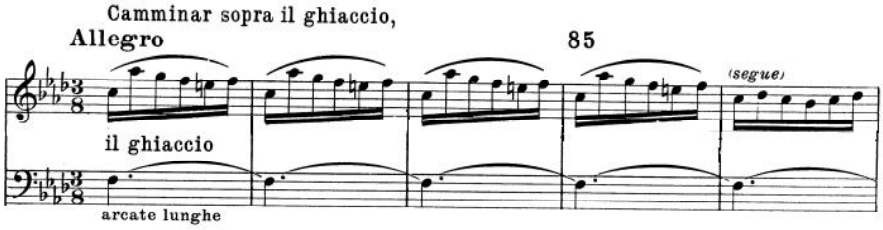


暖炉を囲んで静かな満足感に浸る　　外は雨　あらゆるものが濡れている

第 3 楽章　Allegro　8 分の 3 拍子

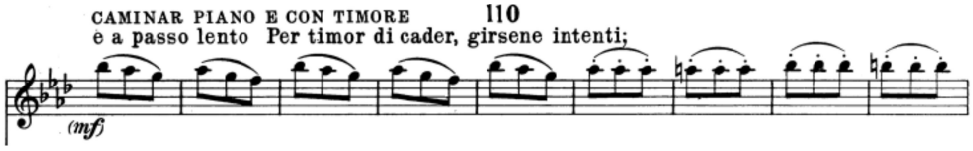
Caminar Sopra il giaccio, e à passo lento	Walk over the ice, and at a slow pace
Per timor di cader girsene intenti;	For fear of falling turn around;
Gir forte Sdruzziolar, cader à terra	Turning loudly Swaying, falling to the ground
Di nuove ir Sopra 'l giaccio e correr forte	Of new rushes over the ice and running hard
Sin ch' il giaccio si rompe, e si disserra;	Till the ice is broken, and unsealed;
Sentir uscir dalle ferrate porte	Hearing out of the iron gates
Sirocco, Borea, e tutti i Venti in guerra	Sirocco, Borea, and all the warring winds
Quest' é 'l verno, mà tal, che gioja apporte.	Such is the winter, but such, that joy brings

Camminar sopra il ghiaccio,　氷の上を歩く

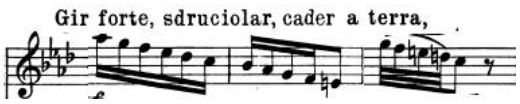


← il ghiaccio 氷

CAMINAR PIANO E CON TIMORE　　WALK SLOWLY AND FEARFULLY
転倒を恐れてゆっくり歩く

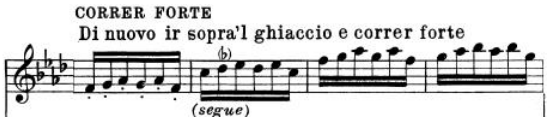


e à passo lento　Per timor di cader girsene intenti;
and a slow pace　For fear of falling, turn around
ゆっくりと　　落ちるのを恐れ、向きを変える

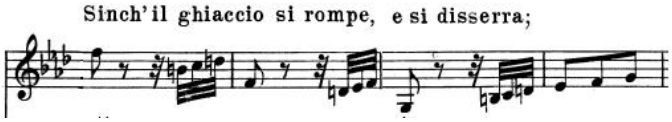


Gir forte, sdruciolar, cader a terra
Turn hard, slip, fall to the ground
向きを変え、滑って、転ぶ

CORRER　FORTE　激走

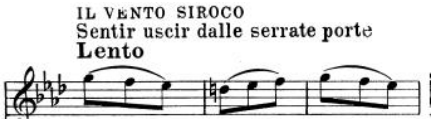


Di nuove ir Sopra 'l giaccio e correr forte　Of new rushes over the ice and running hard
新しい氷の上を強く走る



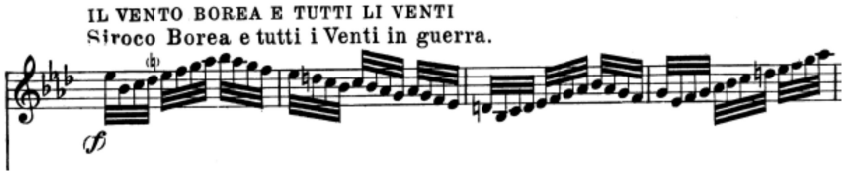
Sin ch' il giaccio si rompe, e si disserra　Till the ice breaks, and melts away
氷が砕け、溶ける

IL VENTO SIROCO　南風

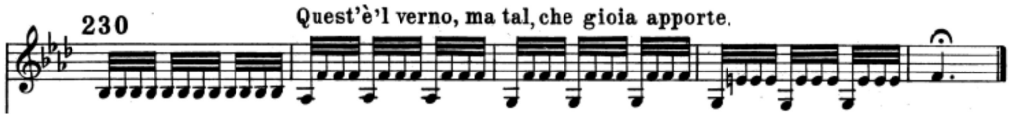


Sentir uscir dalle serrate porte
Hearing out of the locked doors
閉ざされた扉から感じる

IL VENTO BOREA E TUTTI LI VENTI　　THE BOREAL WIND AND ALL THE WINDS



Siroco Borea e tutti i Venti in guerra　　Siroco Borea and all the Winds in the war.
南風、北風、あらゆる風が戦う



Quest'e'l verno, ma tal, che gioia apporte　　This is the winter, but such, what joy it brings
これが冬　しかし、そんな冬が喜びをもたらす

（訳出は、DL 翻訳を参考にしました）

J. S. Bach
オーボエ・ダモーレ協奏曲 ニ長調　BWV 1053R

バッハは 1729 年から 1741 年にかけて、ライプツィヒのコレギウム・ムジクムの指揮をしており、バッハのチェンバロ協奏曲は、その演奏会のために作曲された（wiki)。

前回の 1055 同様、この 1053 もチェンバロ協奏曲から再構成されたものです。前回と同じ話になってしまいますが、原曲がチェンバロ協奏曲でそれをダモーレ協奏曲に編曲したのか、ダモーレ協奏曲が原曲でチェンバロ協奏曲に編曲したのか、両方聞いてみて、楽しんでみてください。

前回オーボエ・ダモーレとともにオーボエ族の話をしたので、今回はすぐに曲の紹介に入りましょう。（前回のプログラムはこちらを参照）

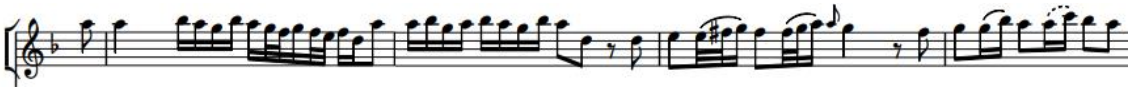
第 1 楽章 Allegro　ニ長調、4 分の 4 拍子。

お約束の？リトルネッロ形式で弦楽器の合奏により、分散和音のテーマが奏でられる。

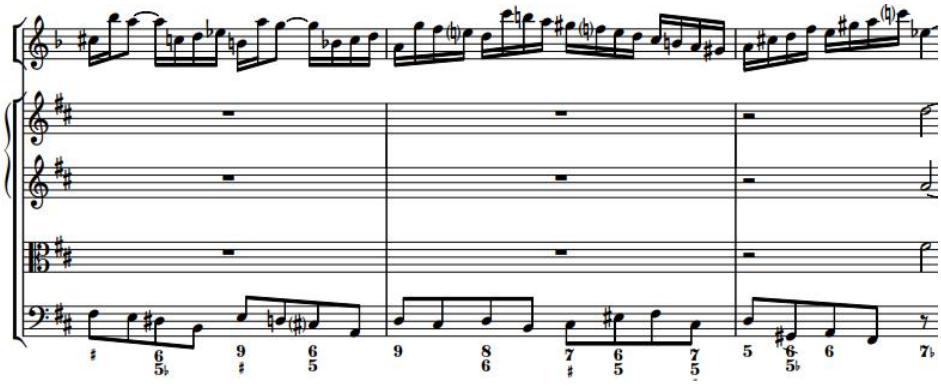
そしてそのテーマが終わると同時にダモーレがテーマを奏で始める。

h-moll になり進行していく。

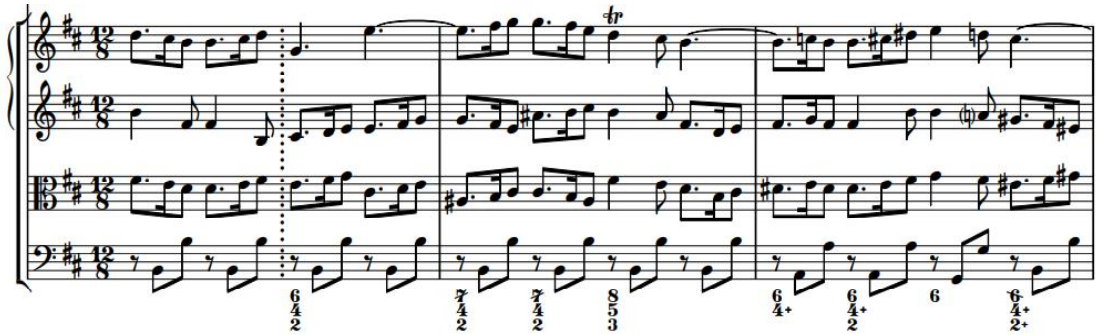
後半、どんどん展開していく。



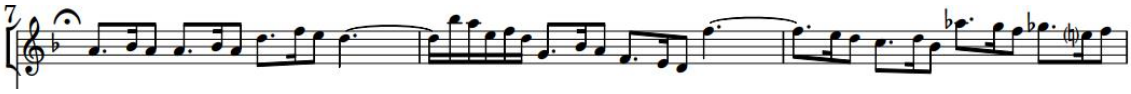
通奏低音と旋律だけになる部分（3 楽章でも同じようなところがある）



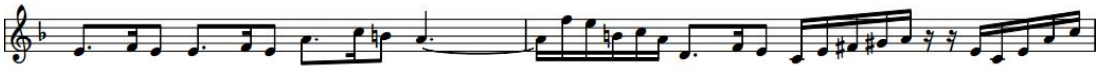
第 2 楽章 Siciliano　ロ短調　8 分の 12 拍子



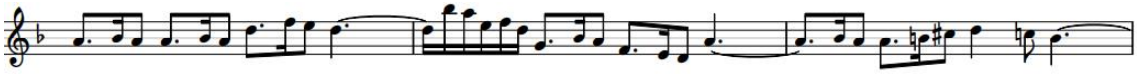
シチリア風舞曲が弦楽合奏で奏でられ、終始の後、ダモーレのソロが始まる。



属調のメロディが現れ、にわかに別世界に行き、原調のメロディに戻る……

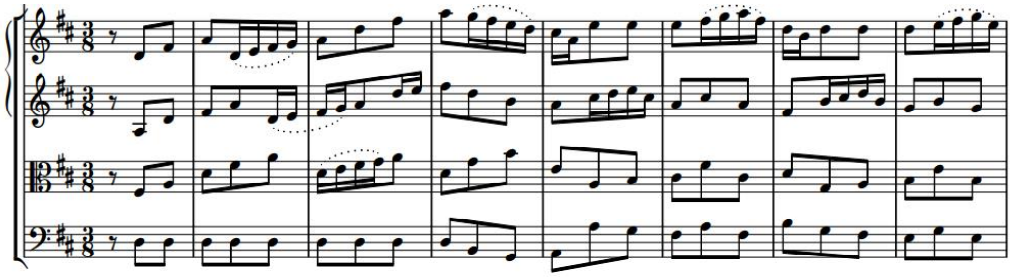


が、進行していき、結尾へ向かう。



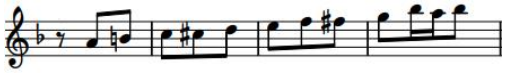
第 3 楽章　Allegro　ニ長調　8 分の 3 拍子

リトルネッロ形式によるフィナーレで､躍動感溢れる舞曲風の弦楽合奏の主題で始まる。そして、そのテーマが終わると、ダモーレが次のテーマを奏で始める。軽快に過ぎていく（であろう）3 楽章をお楽しみください。（前回のプログラムの解説と同じよう気が……）



流れるようなメロディが始まり軽快に進んでいく。

半音階的上昇メロディの後、難解なパッセージが現れる。



転調して繰り返し、コーダへ向かう。

Franz Joseph Haydn　フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

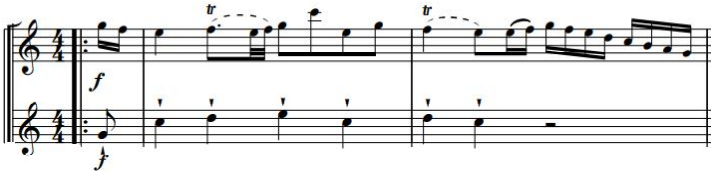
1732 年 3 月 31 日、神聖ローマ帝国オーストリア大公国ローラウにて生まれる。
1740 年から 9 年間ウィーンに住み、シュテファン大聖堂で聖歌隊の一員として加わる。
1749 年、変声のため高音部を歌うのが不可能になり解雇される。
1757 年ごろ、ボヘミアのモルツィン伯爵（Karl von Morzin）の宮廷楽長の職に就いた。[*1]
1761 年、西部ハンガリーの大貴族、エステルハージ家の副楽長となる。その後 30 年間エステルハージ家に仕え数多くの作品を残す。1768 年から 1773 年頃を「シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）」期と呼び、様々な技法を用いた。
1781 年頃、ハイドンはモーツァルトと親しくなった。（1791 年モーツァルト没。）
1790 年エステルハージ家のニコラウス侯爵が死去。その後継者アントン・エステルハージ侯爵は音楽に関心を示さず、音楽家をほとんど解雇し、ハイドンに年間 1400 グルデンの年金を与えて年金暮らしにさせた。これはハイドンにとっては良かったようだ。
1809 年 5 月 31 日、77 歳にて没。

交響曲第 30 番 ハ長調 Hob.I-30　"Alleluja"（1765）

第 28 番から第 31 番の 4 曲は自筆譜が残っており、1765 年に作曲されたことがわかっている。「アレルヤ」という言葉は自筆譜にはないのだが、同時代の筆写譜には書かれている。アレルヤの旋律はバリトン三重奏曲第 64 番ニ長調の第 1 楽章にも見られる。　モーツァルトの「カノン ハ長調 K.553」→

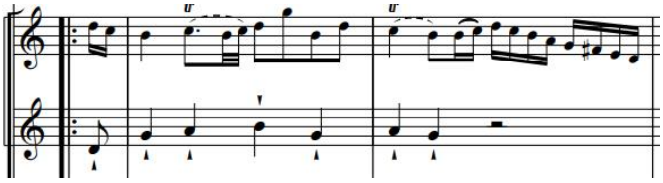
第 1 楽章　Allegro　ハ長調 4 分の 4 拍子　ソナタ形式

アウフタクトで始まる軽快な曲。1st のメロディの下で 2nd Oboe, Hr, 2nd Vn がアレルヤの旋律を奏でる。このメロディは『バリトン三重奏曲第 64 番ニ長調』の第 1 楽章でも使われている。



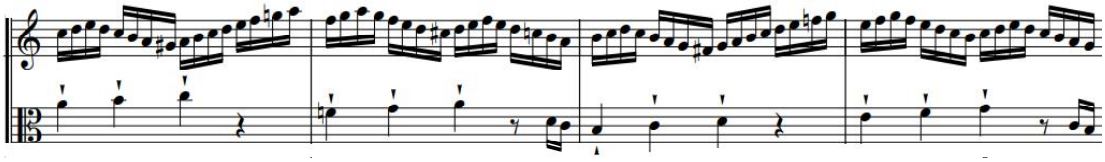
オーボエに誘導され第二主題は同じ動機が Vn のオクターブのユニゾンで現れる。

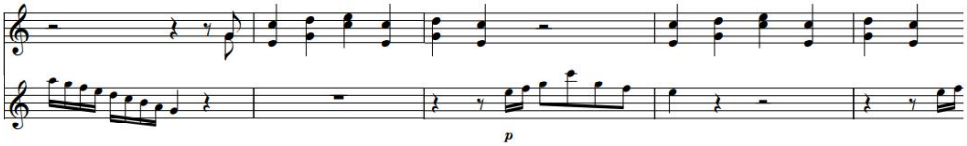
*1 ここで最初の交響曲である交響曲第 1 番が書かれた。交響曲第 37 番の筆写譜には 1758 年の日付が記されており、これらの曲は 1757 年ごろに書かれたと考えられる。



展開部ではお約束通り属調で第一テーマが流れ、展開していく。

軽快な高弦の動きと低弦の四分音符のコントラストが現れ、

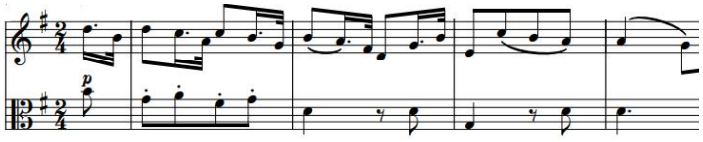




管楽器群と *p* で演奏される弦楽器群とで分かれて演奏され、後にオーボエの G の音に導かれハ長調の第二テーマが現れる。*forz* ののち *p* になり、*f* のコーダで元気よく終わる。

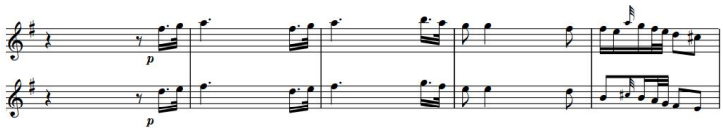
第 2 楽章　Andante　ト長調 4 分の 2 拍子　ソナタ形式

この楽章もアウフタクトで始まる付点のリズムの軽快な曲。



第一主題がヴァイオリンのユニゾンによって奏でられ、それを受けてフルートがオクターブ上でメロディを引き継ぐ。

そして、オーボエが呼応する。



属調に転調して展開部に入ると、フルートのヴィルトオーゾ風のソロが現れ、

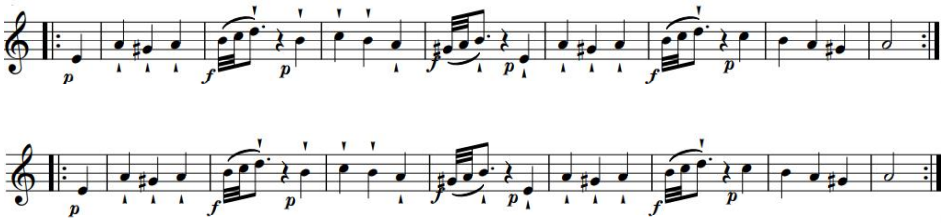
フェルマータで休止し、再現する。

第 3 楽章　Finale tempo di menuet, piu tosto allegretto　ハ長調　4 分の 3 拍子

ホルンと Vn で始まるメヌエットのようだが、表題にあるように、メヌエットのテンポで、ということで、メヌエットではない。3 楽章構成のシンフォニーのフィナーレ、すなわち、最終楽章である。

ホルンとヴァイオリンのユニゾンによるテーマが *p* で現れる。前半のリピート、後半のリピートを終えるとフルートが登場する。（譜例は Vn。Fl はオクターブ上）、

後半をリピートすると、新たなモチーフが出てくる。



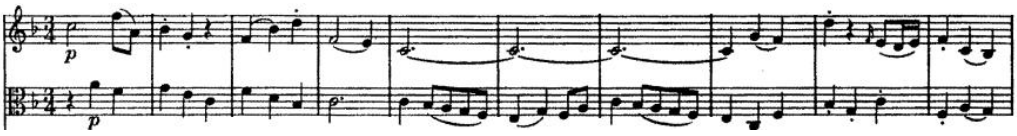
この二つのエピソードの後、最初のテーマが再現し、コーダへ向かう。

交響曲第 58 番　ヘ長調　Hob.I-58　　（1767）

自筆譜は残ってない。第 3 楽章が、バリトン三重奏曲第 52 番とほぼ同一であり、同時期に作られたと考えられる。

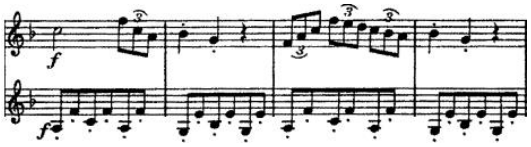
←バリトン三重奏第 52 番（ナクソス 視聴）

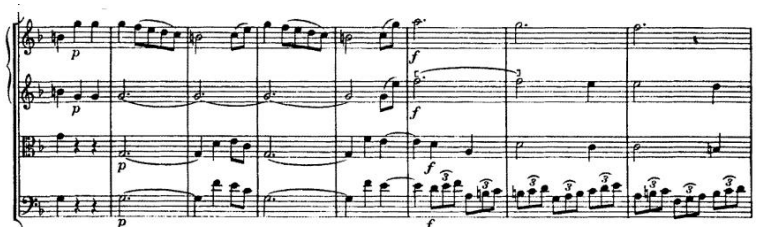
第 1 楽章　Allegro　ヘ長調　4 分の 3 拍子 ソナタ形式



弦楽合奏で静かに始まる。

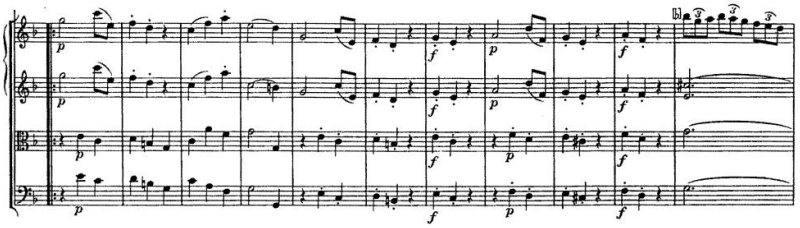
その後三連符が顔を出し、進行していく。



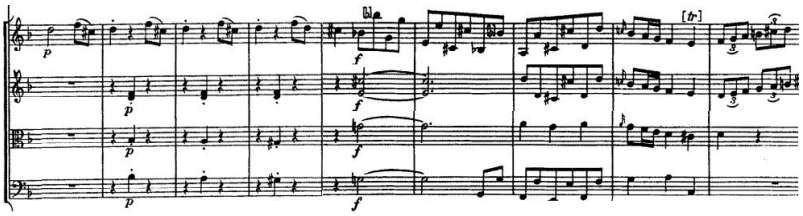


第 2 テーマのモチーフが短く現れるが、すぐにコデッタへと向かう。

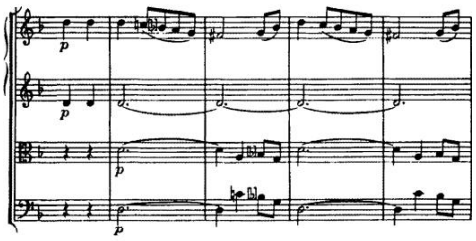
展開部

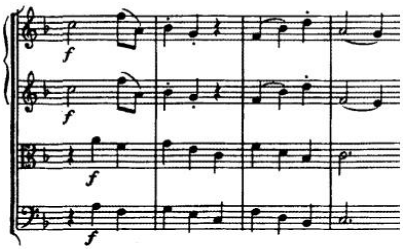


属調で始まる展開部は四分休符からの f を二度繰り返し、減 7 の和音と三連符をきっかけにで展開していく。



静寂もつかのま、再び減七の和音とオクターブの跳躍で緊張感を増していく。

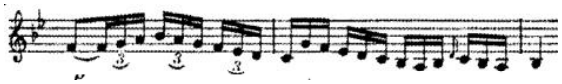




「第 2 テーマ」が顔を出し、第 1 テーマが再現する。そして三連符の流れを経てコーダへ向かう。

第 2 楽章　Andante　変ロ長調　4 分の 2 拍子　ソナタ形式

ハイドン得意の弦楽合奏。トリル、付点、装飾音符で優雅な感じで始まる。



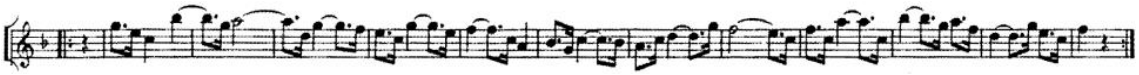
三連符が顔を出し第二テーマを予感させる。

下降音型の三連符の第二テーマ。後の上昇音型となり、コデッタへ向かう。

第一テーマ、第二テーマを織り交ぜ展開していく。第二テーマで再現し（第一テーマを省略し）、コーダへ向かう。

第 3 楽章 Menuetto, Alla zoppa, e un poco allegretto - trio　ヘ長調　4 分の 3 拍子

アウフタクトで始まる軽快なメヌエット。タイが 1 拍め 2 拍めに入っておりよろめく感じ。

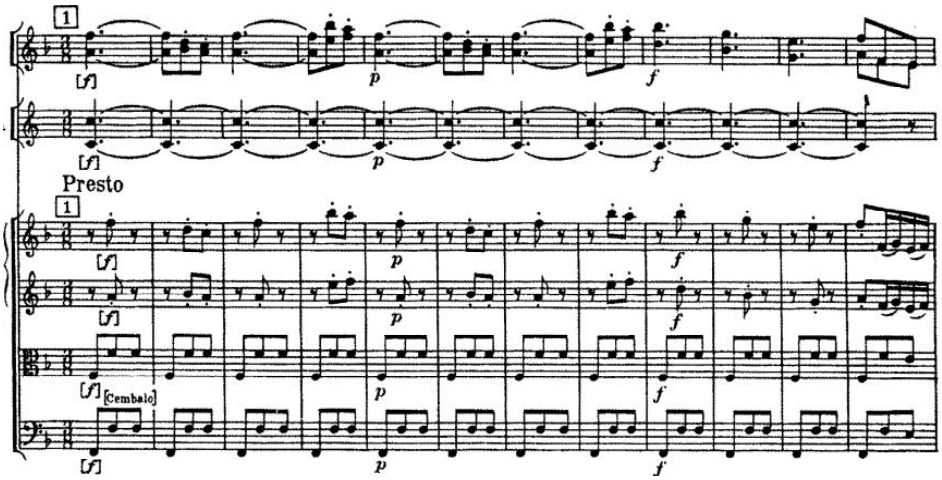


なぜかオーボエはアウフタクトがない。。。なぜだ？？（この譜例は Ob.　上は Vn）

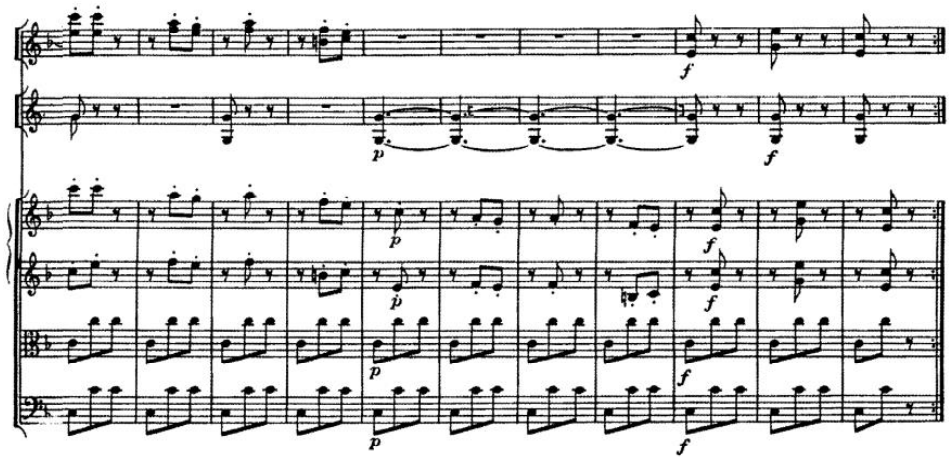
弦楽合奏によるトリオ。

ホルン五度ならぬホルンオクターブに支えられ、*pp* となって消えてゆく。

第 4 楽章　Finale, presto　ヘ長調 8 分の 3 拍子 ソナタ形式



再びホルンのオクターブに支えられ、少々トリッキーに進んでいく。



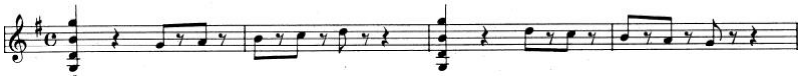
コデッタ（コーダも）の「ズレ」がなんとも楽しい。

展開、そして再現、コーダと続いていく。

Wolfgang Amadeus Mozart ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
交響曲第 10 番ト長調 KV.74

1756 年 1 月 27 日生まれのヴォルフガングは、14 歳になろうとする 1769 年 12 月～ 1771 年 3 月 28 日父とともに初めてのイタリアに行った。1770 年 4 月 25 日の手紙で「1 曲を書き終えてさらに 1 曲を作曲中」と記されており、また、8 月 4 日の手紙では「僕はもうイタリアの交響曲（itallienische Sinfonien）を 4 曲作曲しました」とある。この期間にイタリア風の曲をまとめて作曲したようだ。

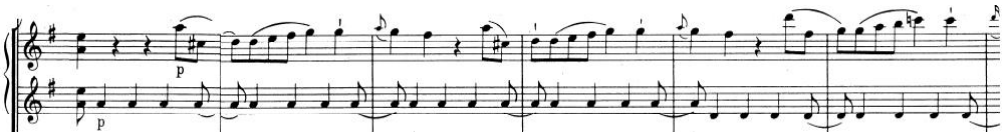
第 1 楽章 Allegro　ト長調　4 分の 4 拍子　ソナタ形式



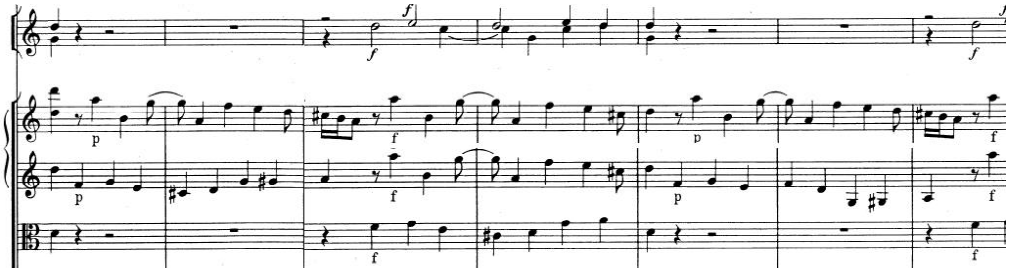
ト長調の I の和音の後に、「ド、レ、ミ、ファ、ソ」の上昇という、シンプルというか無駄がないというか、純粋無垢というか、、、。

そして鳥が囀（さえず）る。（シジュウカラと……）

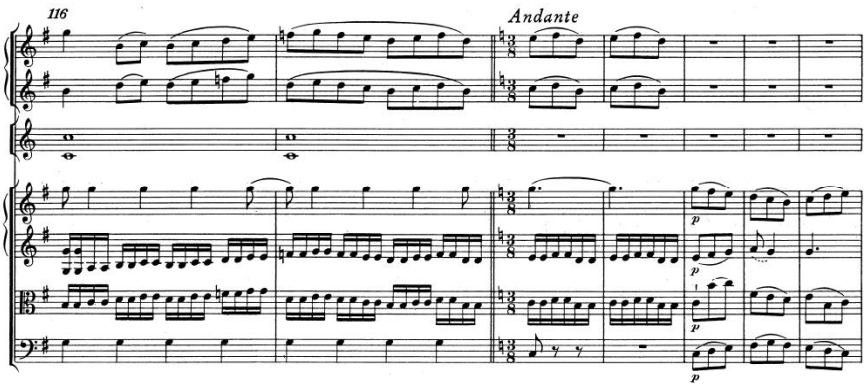
第二テーマは 2ndVn の上で 1stVn がなめらかに。



そしてモーツァルトも、ハイドンとは異なるズレを。

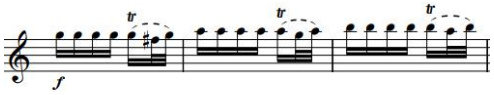


展開し、再現し、コーダに入るとそのまま 2 楽章へ。

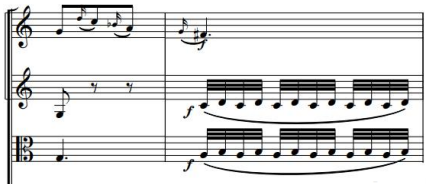


第 2 楽章　Andante　ハ長調　8 分の 3 拍子　二部形式

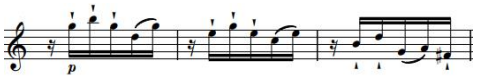
どこかで聞いたフレーズが顔を出す。　　32 分音符がヴィヴラートのようにも思える



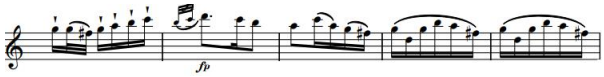
→



かわいらしいフレーズが顔をだし

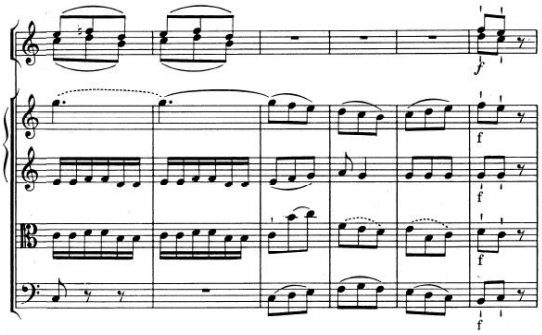


→

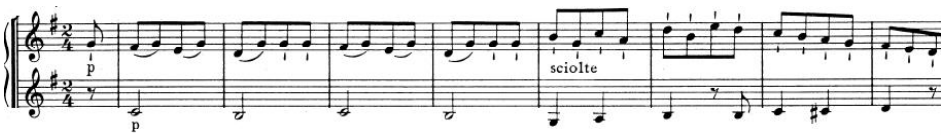


そして再現へ向かう

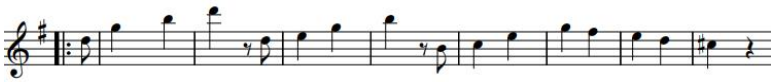
再現部



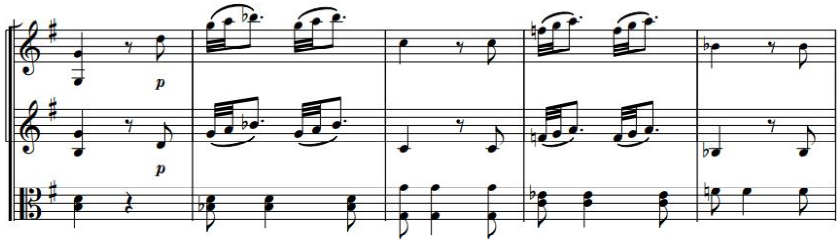
第 3 楽章　Allegro　ト長調　4 分の 2 拍子　ロンド形式　　（トルコ風）



A メロ

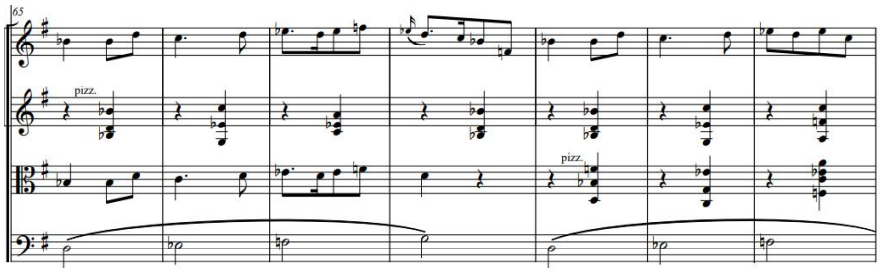


B メロ



C メロ
鳥？

このビオラのシンコペーション好き



D メロ
何気に楽しい

A → B → A → C → D → C → A →コーダ　のロンド

Vn solo & コン・ミス　藤本舎里

３歳より才能教育研究会にてヴァイオリンをはじめる。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第２位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。アマチュアオーケストラとの協奏曲共演のほか、国内オーケストラや室内楽、ソロなど様々な分野で活動。後進の指導にもあたっている。奈良県出身、川口市在住。

オーボエ・指揮　山口尊実

埼玉大学教養学部教養学科卒業。幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也、荒絵理子各氏らに師事。楽器：Oboe:LF、D'amore & EH:Bulgheroni
趣味：S660、virago1100、Mono-ski、ScubaDiving（Resuce Diver）、数学、バドミントン etc.

member

vn　藤本舎里，伊藤温子，大西由梨，松尾沙樹，渡邉昭子
va　高橋良暢　　vc　大和伸明　　cb 森田章
Fl　門傳美智子　　ob　大山明子，原恵　　hr 林義昭，松沢宗一郎
cond,da　山口尊実

◎団員募集しております。詳細はＨＰにて！

第９回演奏会のお知らせ

2 年間のリリア大規模改修のため未定

アンサンブル演奏会などできればなぁと考えております。決定次第 HP 上にてお知らせします。

HP：http://kce.saitama.jp　　mail：bur@kce.saitama.jp